



## 見えてきた課題

園長 笛木 哲

風光る春から、風薫る初夏へ。5月の風はさわやかに肌をなでます。園庭の緑はずいぶん濃くなり、多くの命との出会いが子供たちを楽しませています。入園・進級してから1ヶ月。子供たちは新しい環境に順応し、自分らしさを発揮して園生活を楽しみつつあります。父母会総会では、福田新会長のもとで新しい組織が力強く船出しました。

子供たちの姿から、いくつかの課題が浮かび上がりました。課題が明確になると言うことは次の指導や成長に繋がります。以下三つの課題については、幼稚園だけでなく、家庭でも取り組むことが大切です。どの子ども、どの家庭でも起こりうることで、我がこととして受け止めていただけるとありがたいです。

### ①言葉の暴力

「小学生になる息子がゲームの影響で『ぶっ殺す』と言うのを聞いてショックで強く叱ってしまいました」とお母さんからお聞きしました。本人には悪気はなく、ゲームの中の言葉をただ口にした



だけですが、その言葉の意味することを現実の世界で、何のためらいもなく口にすることはとても怖いことです。その日、強く叱ったお母さんは翌日、お子さんと向かい合いたいと考え、習い事を休ませて親子で心を休める時間を設けたそうです。本園でも、人気アニメに出てくる「ぼこぼこにする」という言葉を投げつけ、言われた子が涙を流すということがありました。また個性（特性）を指摘し、否定する（からかう）言葉を発し、言われた子が混乱するということがありました。

ナイフが触れた体の傷はいつか消えますが、心に届いた言葉の傷は一生癒えないことがあります。人は誰もが自分の痛みにとっても敏感です。幼児でも自分の痛みは分ります。でも、他人の痛みにはとても鈍感です。自分の外にあるものの痛みは、想像するしかありません。その力を育むことは、ピアノや水泳、英語を学ばせるより、もっともっと大切なことです。子どもの発するナイフのような言葉は、大人が気づき、その場で正し、教えなくてはなりません。頭越しに叱るのではなく、きちんと子どもと向き合い、説明し、時には伝え方を教えることが大切です。

### ②大切な自分の体

トイレで女の子に「ちんちん見せて」と言われた男の子が「いいよ」と自分の性器を見せたとの報告がありました。二人とも年長児です。性的な欲求ではなく、自分と違う体に興味を持ったからでしょう。毎年、周りの人の反応が楽しくて「カンチョー！」とニコニコ顔で指先をおしりに向けてくる子が



いますが同じことです。6月からはプール指導が始まります。幼稚園では「プライベートゾーン（水着で隠れる部分と口）のルール」を全園児に指導します。メディアや友達からの不正確な情報ではなく、信頼できる大人がきちんと伝えることが大切です。幼児期は性に対して先入観がなく、素直に受け止めることのできる時期だからこそ、ご家庭でも機会を見つけて話してみてください。

- ・ プライベートゾーンは、その人だけが自由に見たり触ったりしていい大切な場所
- ・ プライベートゾーンは、他の人が勝手に見たり触ったりしてはいけないところ
- ・ お医者さんに体をみてもらう時や幼稚園の先生に手伝ってもらう時以外で、勝手にプライベートゾーンを見たり触ったりしようとする人がいたら、「さわらないで」「イヤだ」と言って逃げて、信頼できる大人に話すこと
- ・ プライベートゾーンに関する言葉や行動で、友だちに嫌な思いをさせないこと

### ③ 子どもを大人の意図に誘導する言葉



「幼稚園はつまらなかったの?」「幼稚園で嫌なことがあった?」「先生に叱られた?」とお子さんに聞いたことはありませんか? 帰宅後のお子さんが涙顔だったり疲れた表情だったりしたら、心配になるのが親心というものです。でもその言葉には、

「友だちにいじめられたから泣いているに違いない」「顔が曇っているのは先生に怒られたからだ」と親御さんが納得できる原因を推測し、わが子を守ろうという気持ちが混ざり込んでいます。大好きな人からの質問に、たいていの子は親の期待を裏切らないように「うん」と頷きます。実はそういう親御さんの心配から発する言葉が、子どもを幼稚園嫌いにしたり、行きたくない理由にしたりすることがあります。「うん」と頷く子に親御さんは「友だちからいじめられたの?」「先生が怖いの?」とさらに心配を募らせる言葉を重ねます。こうして親御さんの言葉がお子さんの気持ちをコントロールするのです。ご心配はたくさんあるでしょうが、幼稚園は楽しいところという気持ちがもてるような声かけをお願いします。「幼稚園で楽しいことあった? 幼稚園の方から〇〇ちゃんの笑い声が聞こえたよ」と。親御さんのご心配は幼稚園に連絡していただければ、きちんとご説明します。

## 新型コロナ対策を変更して

新型コロナの感染拡大を抑えるために幼稚園生活を制限し、行事を縮小、中止した3年間でした。4月から「マスク不要」としましたが、様々な事情からマスク着用を継続している子も教師もいます。一方で、友だちの目を気にしてマスクを外すか付けるか迷う子の姿をみかけます。朝の挨拶の時にも当たり前のように両手を出して消毒を待つことが定着している子もいます。3年間のコロナ禍の生活が当たり前になってしまったことに恐ろしさを感じます。



マスクを外して保育に当たる教師が、「〇君が、私の顔をよく見てくれるようになりました。私の口の動きを見て、自分の口を動かしています」と嬉しそうに報告してくれました。やっと表情の見える保育が出来る喜びを感じた出来事でした。